

AFC Forum

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers

3

2015

AFC Forum

2015
3
特集

特集 農に活かす異業種の「知恵」



農に活かす異業種の「知恵」

■AFCフォーラム 平成27年9月1日発行(毎月1回)日発行/第62巻12号(775号)
■発行/(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-4 Tel.03(3270)2268
■販売/一般財団法人 農林統計協会 〒153-0064 東京都目黒区下目黒3-9-13 Tel.03(3492)2987 ■定価514円 [本体価格 476円]

●次代に継ぐ



『千まい田』西口 秋楓 石川県輪島市立鳳至小学校



JFC 日本政策金融公庫 農林水産事業本部

<http://www.jfc.go.jp/>

第10回記念 6次化の先駆者—EXPO仲間大集結



アグリフード EXPO 東京 2015 プロ農業者たちの国産農産物・展示商談会

日時 8月18日(火)/19日(水)
10:00~17:00 10:00~16:00

主催 JFC 日本政策金融公庫

会場 東京ビッグサイト 西1・2ホール



AFC フォーラム 3

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers 2015

特集

農に活かす異業種の「知恵」

3 顧客満足、利益・雇用確保を実現する農業へ

藤本 隆宏
生産管理、販路開拓など課題が山積する今後の農業経営に、異業種で発達した「ものづくり」の原理をいかに応用するか。成功事例から考察する

7 異業種のビジネス手法を農業に生かす

楠元 武久
国が成長を期待する分野と位置付けられる農業。「強い農業」になるため、6次産業化をさらに一歩進化させる手法を異業種から学ぶ

11 生産性を上げた「トヨタのカイゼン」手法

木村 誠
トヨタ自動車との運命的な出会いにより、トヨタの生産方式やモノづくりの哲学を学び、生産性の向上を見事に実現した農業生産法人がある

情報戦略レポート

15 養豚、採卵鶏は増収増益 稲作、茶、肉用牛は大幅減益に

—2013年農業経営動向分析—

経営紹介

経営紹介

23 地域特性生かし環境変化に対応 エコフィードや稲WCSで活路

有限会社川淵牧場／高知県
「逆風に向かってこそ飛躍のチャンスがある」。メガファームに成長した酪農家は直面する問題に、地域の特性から解決策を見出してきた

変革は人にあり

25 石原 和秋

イシハラフーズ株式会社／宮崎県
野菜の冷凍加工会社が農業へ参入。農業者とリスク分担する「共同委託生産」や「フィールドマン」による情報管理など独自の手法が経営を成功へ導いた



撮影：豊高 隆三
千葉県南房総市千倉町
1998年3月撮影

千倉の花畑・空撮

■房総半島の最南端に位置する千倉では、温暖な気候を生かし花の栽培が盛んだ。早春にはストックとキンセンカを中心とし、花盛りとなる。花畑を上空から望むと、まるで春色のパッチワークのようだ■

シリーズ・その他

観天望気
持続可能な社会の原則 谷口 吉光 ……2

農と食の邂逅
株式会社アグリー 井上 早織
青山 浩子(文) 河野 千年(撮影) ……19

耳よりな話 156
酪農関連の碑めぐり(その8) 加茂 幹男 ……22

フォーラムエッセイ
大切にしていきたいこと 水野 真紀 ……28

まちづくり むらづくり
農村生活体験のグリーン・ツーリズム
農家と子どもが奏でる「こころ」の交流
おうしゅうグリーン・ツーリズム推進協議会 ……29

書評
小田切 徳美 著『農山村は消滅しない』
村田 泰夫 ……32

インフォメーション
交叉点 千葉産農産物の輸出拡大へ
～千葉支店の現場レポート～ ……33

交叉点 タイでビジネスチャンスを支援する商談会を開催
情報企画部 ……35

宮崎のスーパーで佐賀の物産フェアを開催 佐賀支店 ……35

新規就農者へ経営方法をアドバイス 鳥取支店 ……35

信州でビジネスチャンスをテーマに講演会を開催 長野支店 ……35

「アグリフードEXPO大阪2015」は両日とも盛況 情報企画部 ……36

「技術の窓」で農業の最新技術情報を提供しています！ ……36

みんなの広場・編集後記 ……37

ご案内
第10回記念 6次化の先駆者—EXPO仲間大集結

アグリフードEXPO東京2015 ……38

*本誌掲載文のうち、意見にわたる部分は、筆者個人の見解です。

観天 望気

持続可能な社会の原則

東日本大震災と福島第一原発事故から四年が過ぎた。表層的には東京オリンピックやリニア新幹線など東京一極集中を目指す動きもあるが、社会の底流はこれまでの大量生産・大量消費社会から持続可能な分散自律型社会への転換を模索し始めている。私の周りにも「田園回帰」「地域自給」「分散型エネルギー」などという言葉を使う人が増えている。それも中小企業の社長、総菜屋の跡取り、脱サラ農家など市井の人たちがそういうことを真剣に考えるようになってきている。だからこの変化は本物だと思う。

ところで持続可能な分散自律型社会とはどんな社会だろうか。これについてはデニス・メドウズらの「成長の限界」から、最近ではセルジュ・ラトゥーシユの「脱成長」まで四〇年に及ぶ議論の蓄積がある。日本でも槌田敦、室田武、玉野井芳郎、鶴見和子、内山節、広井良典らに続く議論の系譜がある。

私はこうした先人に学びつつ、持続可能な分散自律型社会の原則について考えてきた。それはおよそ次のようなものだ。

「社会の仕組みや人間の行動の良否はまずそれが長期間(三世代くらい)続けられるかどうかで判断される」「地域の環境容量を超える物質やエネルギー消費をしない。環境容量の限度内で暮らす」「地域の物質循環・生命循環に基づいて暮らす」「貨幣経済の比重が低く、互酬経済の比重が高い」「心やたましいのつながりを尊ぶ」。こうした五つの原則を実現するのは都市部より農山漁村の方がはるかに容易だろう。だから私は持続可能な分散自律型社会の中心は農山漁村になると信じている。

少しでも環境意識を持った人なら、こうした原則に賛同してくれるだろう。しかし、これを現実に適用しようとすれば、とても困難にぶつかる。なぜなら、グローバルレベルや国家レベルの政策決定は相変わらず経済成長とグローバル経済化などの固定観念にどっぷり漬かっているからだ。いずれこの未来社会のビジョンをめぐる大きな社会的・政治的論争が生じるだろう。それが生産的な議論になるように、私たち研究者も未来のビジョン構築に積極的に参加しなければならない。

秋田県立大学地域連携・研究推進センター 教授

谷口 吉光



たにぐち よしみつ

専門は環境社会学、農業食料社会学。大学の仕事の傍らNPO法人地産地消を進める会代表理事などを務め、地域の問題解決に住民と一緒に取り組んでいる。最近の著作に『食と農の社会学』(ミネルヴァ書房、共編著、2014年)など。

畑の作物も
大自然も待つてくれな
ひたすら前を向いて
四四歳から就農
農業はいいですよ

農と食
の邂逅

井上 早織 さん

三重県名張市
株式会社アグリー 代表取締役

野菜を加工した六次産業化、古民家を生かした農園カフェ、畑の近くには農業のテーマパークの計画など広がる数々の夢。自然と共生する自然農に触れ、強者も弱者も自然の中に共存する。農園芸福祉という道を進む。





P19:「農業に賛同(agree)してくれる人を増やしたい」という思いから社名をつけた。スタッフに囲まれて笑顔の早織さん(左から2人目) P20:頑張ってくれる元気なスタッフと共に(右上と左)「太陽光を浴びる青々とした野菜、その野菜に栄養を与える流水の音、ハウスの中だと幸せだなあと感じます」と早織さん(右下右) お正月にスタッフ全員で書き初めをした(右下左)

人生折り返しでの就農

誰もが人生の折り返し地点に立つ。だが、四〇歳を過ぎて、農業と福祉という未経験の世界に足を踏み入れた井上早織さん(四六歳)は、相当潔い人である。

農業との出会いは、消費者が農業を学ぶ「赤目自然農塾」(名張市)の体験だった。当時住んでいた大阪から毎月通って、二年間コメづくりを学んだ。その楽しさを夫の弘さん(五九歳)に「農業はいいよ」といつも耳元でささやいていた。

その影響を受けたのか、会社勤めをしていた弘さんも農業に目覚め、水耕栽培での就農を決心。偶然にも、水耕栽培の技術指導を手掛ける企業が名張市にあった。二人は同市で土地を借り、二〇一一年、「株式会社アグリ」を設立し、小松菜、リーフレタスなどの生産を始めた。

最初から波瀾万丈だった。弘さんの勤めていた会社が資金を提供してくれることになっていったが、話が頓挫。

急ぎよ、資金を二〇〇〇万円(日本公庫)借りたが、それでも足りず、ハウスを建てる土地の整地から栽培ベッドづくりまで、弘さんは自身で行った。収量が予定通り上がらなかつたり、病気で野菜が全滅したことも。弘さんはハウスに泊まり込んで、栽培管理を行った。

早織さんは持ち前の明るさで広報を担当し、ブランドの構築に力を入れてきた。こだ

わって大切に育てている野菜を思いと共にお届けすることが大切と考える。「時間はかかって、丁寧につくり丁寧に販売する。それがONLY ONEにつながると思っている」

農業と出会えたから自分がある

さらに、福祉との連携を始めたのは二〇一二年。地元の養護学校から、生徒を研修させてほしいと言われ、早織さんは喜んで受け入れた。その後、不登校のお子さんを持つ親御さんからも働かせてもらえないかと相談を受けたが、万一のときの責任を考え、きちんとした体制を整備することが必要と判断した。

懸命に情報を集めると、就労継続支援事業所であれば、そういった支援ができることを知った。

すでに地元にある同様の事業所から助言を受け、同年一月、NPO法人「あぐりの杜」を設立。農園共福祉事業を活動の一つに位置付け、就労継続支援B型事業所「あぐり工房JOY」を開設した。

就労継続支援事業所とは、ハンディを持った人が、自立、就労できるようにするための訓練と指導を行う国の障害者総合支援法に基づいて認可された事業所だ。

アグリが、あぐり工房JOYに業務を委託する。すると事業所に登録している障がい者と、彼らを指導する就労支援員がアグリーの農園に来て作業をする。

現在は二〇人の身体・知的、精神などさまざまな障がいを持つ人が登録されている。「優しさだけでは自立できない。親御さんが先に亡くなったとしても、自立できるように努めてほしい」と真剣な眼差しで語る。もともと父が営む会社で販売促進の仕事をしてきたが、経営が破綻。その後、両親は



夫の弘さんに「早織さんを一言で表現すると？」と尋ねると、「活力とストレスの塊かな」。「その両方とも受けとめてもらっています」と早織さん

年金で十分豊かな暮らしをしていたにもかかわらず、突然母がみずから命を絶った。早織さんはこの事実を受け入れられず、苦しい月日を送った。そんなときに出会ったのが赤目自然農塾だった。

自然と共生する「自然農」を教えてください。川口由一氏と出会い、農を通して自然の摂

理に魅了された。

コメづくりは苗代づくりから収穫まで全て手で行った。田植えでは足が泥に取られて思った以上に重労働だった。でも、土の香りを嗅ぎながら無心に苗を植えていき、ふと後ろを振り返ってみると、「なんともいえない達成感があった」

農家はどんなことがあっても畑に立つ。自然も作物も待つてくれない。それゆえ、ひたすら前を向いていかなければならない。「もし母に前に向かっていくものがあったら、死を思い留まっていたのかもしれない。長い間母の死と向き合い、それを消化しよう」と苦悩しているうちに農にたどり着き、今の私がある。ようやく自分の生きる道を見つけられたように思うと同時に、母はみずからの命をもって私にどう生きるかを教えてくれたのだと、捉えられるようになった」

みんなで夢を叶えたい

農園で働くスタッフは皆個性が強く、それぞれ個性がときにはぶつかり合うこともあるが、その都度向き合い、互いが成長し合える関係ができてくつあるという。

一見、早織さんたちがお世話をしているようにみえるが、実はハンディのある人から学び、与えてもらうことのほうが多いそうだ。スタッフ同士のチームワークもよく、障がい者を受け入れながら、さまざまな問題について話し合い、工夫することができた。

たとえば、障がいを考慮し、分かりやすい作業工程にせざるを得なかったが、今考えたと作業の効率化につながっている。

眉間にしわを寄せ仕事していると、「顔こわい！」と直球で指摘されるし、落ち込んでいるのを隠して仕事していると「だいたいぶよっ！」と、後ろから肩をたたかれる。「向き合えば向き合うほど、いろいろな気づきがあり、私を人としても経営者としても育ててくれる」と早織さん。

二〇〇〇平方メートルのハウス。最初は早織さん夫婦とパート二人で回してきたが、今は常時十数人の障がい者が作業している。当然、人件費の負担は重いが、アグリを軌道に乗せ、障がい者に少しでもよい労賃を提供するため六次産業化を計画している。

規格外の野菜で加工品をつくり、あぐりの杜の拠点である古民家を農園カフェにして、尋ねてくる人に使ってもらいたい。さらに、ハウスの近くに新たに借りた農地で小さな農業テーマパークも計画中だ。

そして、一〇年のうちに今頑張ってくれている仲間の中から、アグリを引き継ぐ者を育てるという目標もある。

「まだ航海は始まったばかり。乗組員が少しずつ増えることに夢と希望も一緒に積み込み、ときにはその重みがプレッシャーになるが、みんなが共に支え合い、生きがいとなるコミュニティをつくっていききたい」と語る。

(青山浩子／文 河野千年／撮影)

酪農関連の碑めぐり(その8)

日本政策金融公庫
テクニカルアドバイザー

加茂 幹男

愛

知県の知多半島にあるJRW豊線の半田駅前(三頭の乳牛をかたどり)「知多酪農発祥之地」と書かれた大きな石碑(レリーフ)が、発祥の由来を書いた副碑とともに建てられています。

副碑には「明治初期に、四代目中笠又左エ門氏は滋養と健康の目的で乳牛を購入し自家飲用に供していたが、明治十七年一月、牛乳を愛養舎(かひじや)と名付けて営業を始めた。明治十九年、牧場の西に隣接し武豊線

半田停車場が設置され、明治三十二年、終町に移転した。その後、先人に習い乳牛を飼育する者が増え昭和十二年、知多牛乳が設立、昭和五十六年、みどり牛乳に改められ知多半島の酪農も大きく発展し日本一の酪農地帯となる。ここに、酪農発祥百年を記念し同志相集り先人の遺徳を讃え、碑を建立するものである」と記載されています。

知

多酪農は半田市にあるミツカン酢の醸造元、株式会社中笠酢店の創業四代目中笠又左衛門が牛を飼いだしたのが最初といわれています。

一八六七年、一三歳で中野家(四代目以降「中笠」に改名)の養子に入り、四代目を襲名した後は多角的な事業の展開を図ります。彼は進取の気性に富んだ人物で、本業の酢を伸ばすだけでなく、ビール、金融、鉄道、紡績、ガス、

時計製造、牛乳製造など、次々に新たな事業へ進出しています。

八二年頃、西洋人の飲んでいる牛乳が健康増進によいと知り、家族のために京都や越前から数頭の牛を購入して飼育を始めました。その後、牛舎が焼失し、八五年にわが国で初めて英国からホルスタイン種の乳牛を購入して愛養舎(かひじや)と名付けて営業を始めた。明治十九年、牧場の西に隣接し武豊線



「知多酪農発祥之地」碑

や従業員が飲用し、余ったものは温めて販売されました。当時は「牛乳を飲むと角が生える」とうわさされ、販売は苦戦しますが、昭和の初め頃には牛乳を求める行列ができ、瓶詰め牛乳の配達が始まりました。一九三四年に愛養舎を含む七つの牧場が任意組合を結成し、三七年には牛乳営業取締規則の施行を契機に、共同処理工場を興して「知多牛乳」が誕生しました。

戦後、五七年に知多牛乳生産農協が設立され、七三年にはブランド名が「知多牛乳」から「みどり牛乳」に変更されました。二〇〇〇年に「みどり乳業株式会社」が設立されましたが、近年の飼料価格の高騰や乳価低迷などの影響によって一四年廃業となりました。国内の酪農家の多くが厳しい経営状況にあります。知多半島で酪農を営む方々のさらなる発展を期待します。

F



Profile

かも みさお
1950年北海道生まれ。岩手大学農業機械学科卒業後、農林省東北農業試験場入省。農林水産技術会議事務局、(独)農研機構近畿中国四国農業研究センター四国農業研究監、(独)農研機構畜産草地研究所草地研究監などを経て、2010年から日本政策金融公庫に勤務。専門は畜産草地で、主な研究対象は飼料の収穫・調製・給与など。

Forum Essay

フォーラムエッセイ

家での食事はできる限り食材から調理を、また、近所のスーパーで購入することが多い食材は、国産品を選ぶように心掛けています。

魚売り場で一番にチェックするのは、実は、あら・コーナー。

冬は、ブリのあらが並ぶので、コトコト煮てぶり大根に。金目鯛の頭部があった時には、心の中でガッツポーズをとってしまいます。目の周りのトロトロが大好きなのです。

野菜では、たとえば、泥付きの根菜類をよく購入します。

お気に入りのサツマイモの食べ方は、自家製石焼きイモ。ダッチオーブンに敷き詰めた石の上に、タワシで皮をゴシゴシ洗ったサツマイモを乗せ、時間をかけてじっくりと焼いていきます。

職業柄、プロポーシジョン維持もすごく大事なのですが、焼き上がったおイモを前にしたら、もう、ダイエツトは明日からね♪となりまして(笑)。徳島の鳴門金時、鹿児島島のベニサツマ、茨城のベニアズマなど、それぞれ違う味わいとおいしさになるのですから、いくらでもお腹に収まるといっわけです。

「なんでもいいやと思って食べるのはイヤなの」。祖母はよく言っていました。

大正生まれの祖母は、戦後すぐに始めたというぬか床をととても大事にしています。また、カレーは市販のルーを使わず、小麦粉とカレー粉でつくっていました。

「なんで、おばあちゃんのカレーはまっ黄い黄いなんだろうね？」と幼かった姉や私は不思議に思っていたのですが、何でつくられているかがしつかりと分かる料理を食べようとしていた祖母の姿勢がうかがえます。添加物をなるべく取らないようにという配慮もあつたのでしょうか。

食べた物によって自分につくられるのだから、食べ物にこだわることが、自分を大切にすることにつながると考えていた祖母。素敵だなあと思います。

外に出れば、いわゆるロケ弁当とか外食が続いてしまいがちです。だからこそ、家庭においては、祖母のように、家族や自分をつくってくれる食べ物を大切にしていきたいと考えています。



女優
水野 真紀

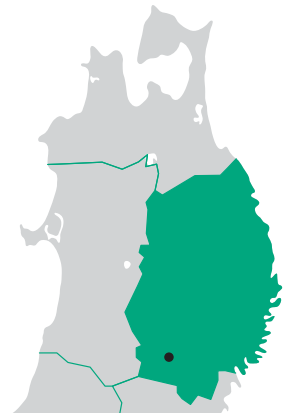
みずの まき
第2回「東宝シンデレラ」審査員特別賞を受賞し、NHK朝ドラ「凧と」で女優デビュー。グルメ情報番組「水野真紀の魔法のレストランR」(毎日放送)では司会を務め15年目を迎える。今年4月には、三女・雪子役として好評を博している、舞台「細雪」(大阪・新歌舞伎座ほか)に出演。

大切にしていきたいこと



農村生活体験のグリーン・ツーリズム 農家と子どもが奏でる「まじろ」の交流

岩手県奥州市
おうしゅうグリーン・ツーリズム推進協議会



思い出と感動がいっぱい

「おらえの息子はどこだ?」。おでこに手を当て、朝日を避けながら一生懸命にバスの窓に子どもの姿を探すお父さん。

「どこにいるんだろうなあ。おお、いたいた。あんなとこさ、いるいる。おおい」。ぱっと明るい笑顔に変わって手を振るお母さん。

大きく手を振るお父さんとお母さんに、笑顔で、手を振りかえしている子どもたち。

三日前、子どもたちは(対面式)をして、農家の車に、大きな荷物とともに納まり、分散していった。

ところが、今は、対面式での子どもたちの、わくわくと、ときどきの入り混じった複雑で不安な表情からは、まったく想像できない光景である。三日間の農家との生活で、子どもたちは普段では体験することのできない農家との「心と心」のふれあいをし、思い出と感動で胸いっぱいになった。

なったからであろう。

走りだすバスに向かっていつそう大きく手を振るお父さんとお母さん。

小さく遠ざかっていくバスを見送り、「行ったなあ」「さてと、お疲れさんでした」と、無事に送り出した安堵の気持ちと、別れの寂しさを隠し、その場を後にする。今見送った子どもたちに、成長したわが子の姿を重ねて至福の思いに満たされているのだろう。別れの光景はいつ見てもほろりとする。

この子どもたちは、大阪や東京からやってきた修学旅行の高校生や、お隣の宮城県からの自然体験学習の中学生や小学生だ。

そして農家とは、岩手県奥州市と奥州市に隣接する平泉町で教育旅行の受け入れをしている「おうしゅうグリーン・ツーリズム推進協議会」(以下、推進協議会)の農家である。

推進協議会のある奥州市および平泉町は、岩手県の内陸南部に位置し、北上川によって開か

れた、県内でも有数のコメどころである。また世界遺産の平泉町に代表される文化の町でもある。

元々、グリーン・ツーリズムへの取り組みは、旧衣川村の教育旅行(小・中学校の授業の一環として農山村での生活を体験する農家民泊による修学旅行・自然体験教室など)受け入れからスタートした。

その後次第に、小さな村だけでは受け入れが間に合わなくなり、順次、隣町である前沢町、胆沢町を巻き込んで受け入れ態勢を整えてきた。

二〇〇六年三月には、教育旅行の受け入れを目的として、奥州市を構成する水沢市・江刺市・前沢町・胆沢町・衣川村の旧五市町村と平泉町に一つずつ推進協議会が置かれ、農家との連携や子どもたちの受け入れを行っている。

一戸の農家に子どもたちを受け入れ、農家のお父さん・お母さんが自然体験学習の指導を行う。学習の内容は、時季や天候で異なるが、大きくは水田、畑、果樹、花きの作業に取り組むこと

profile

奥州市

岩手県の内陸南部に位置し、水沢市、江刺市、前沢町、胆沢町、衣川村の5市町村が合併し、2006年2月20日に誕生。中央を北上川が流れており、水と緑に囲まれた地域である。総面積のうち、田が17.4%、畑が4.6%、宅地が3.7%で、農地の割合が高く、稲作を中心とした複合型農業により、県内屈指の農業地帯となっている。

おうしゅうグリーン・ツーリズム推進協議会

2006年2月、旧水沢市・江刺市・前沢町・胆沢町・衣川村と平泉町で設立(会長:森岡誠)。地域資源を活用した体験学習メニューにより子どもたちの楽しい思い出づくりを支援。ほかに、農家の学校訪問など「心の交流」をしている。「第11回オーライ!ニッポン大賞グランプリ」(内閣総理大臣賞)。

ができる。
たとえば、果樹では、江刺地区の特産品であるリンゴの摘花から収穫、出荷までを、花きでは、衣川地区の特産品であるリンドウの定植から栽培、収穫、出荷、出荷後の片付けなどを体験することができ、その他にワラ細工での歳縄づくりなど地域の伝承文化の体験や、郷土料理のほつと(すいとん)汁をつくるなど、農家はいろいろと工夫をこらしてくれている。

農家には、農村生活体験料が支払われるが、料金には、前述のような作業着や長靴、手袋から、食費にかかる費用まで全て含まれている。現在、約二〇〇世帯の農家が登録されており、岩手県の「農林漁家への民泊に係る取扱い指針」並びに「岩手県体験型教育旅行推進計画」に基づき、衛

生講習会や保菌検査を行い、推進協議会主催の勉強会や研修会なども定期的に開催している。

対面交流でこぼれる笑顔

「一番楽しかったのは、家族みんなで、食事をしたことです」嫌いだった野菜を、初めて食べることができました。しかも、おいしくて、びっくりしました。『なんといいっても、お母さんの料理がとってもおいしかったです』

中学生の感想である。春から夏にかけての受け入れは、中学生の体験が多い。話を聞くと「初めてシイタケを食べることができた」「ピーマンは嫌いだけど、食べることができた」と、目をまん丸くして話してくれる。

農家は目の前の農作物について、生徒にいろ

いろと話しながら作業を進める。ある農家では、種をたくさん並べて、「種当てクイズ」をやるそうだ。普段食べている野菜なのに、どんな種なのか知らない生徒は多い。農家はさまざまな独自の方法で、生徒に農作物の事や、農作業の事を伝えていく。

生徒は知識だけでなく、実際の農作物を見て、農家の話を聞きながら自分で野菜を収穫し農家と一緒に料理して、家族全員で食べるのだから、その味は、ひと味もふた味も違うようだ。

推進協議会では、受け入れた学校に農作物の生育状況を年に二回報告している。生徒が「まい種や苗が、今はこれくらい成長しました」と、農家の畑や田んぼの写真を送り見てもらう。そして一月には「おおいで米」として収穫したコ



上: “お父さん”から教えてもらい、ハクサイの収穫に奮闘中の生徒たち
下: 別れの様子

メを学校に届けている。

おうしゅうで体験した「田植え」や「苗箱洗い」「稲刈り」などの体験や、農家のことを思い出しながら、おうしゅうのコメを味わってもらった。めだ。

手間暇かけたコメづくりや、野菜づくりが実を結び、食べ物となっていることを知ってもらい、その大切さを考えてもらうことでもある。ちよっぴりの「おらえ(私たち)のコメを食べてほしい」という農家の思いも込めながら…。

生徒を送り出した学校との交流も続けている。二〇〇六年に受け入れた宮城県の中学校の、数え年の一五歳のお祝いの会である「元服式」へ参加の招待を受けたことがきっかけだ。

また中学校の文化祭への参加や、生徒・PTAとの交流会なども、学校側の招待に応え、その学校の生徒を受け入れた農家が参加している。

交流会へ向かう農家を乗せたバスの中は、とても賑やかだ。生徒の写真や生徒からの手紙・感想文などを持参する農家もいる。「この子はね、部活を頑張ってる子だよ。この子は、おとなしいけど、すっごくしつかりしている。まさに、わが子自慢である。

交流会では、それぞれの学校が、思いを込めてとても温かく迎えてくれる。農家体験の発表などでは、「あんなに、おれらの言ったことを、しっかりと聞いてたんだなあ」と、農家も本当にうれしそうだ。「あんなに、ちゃんと聞いていてくれるんなら、おれらも、がんばらねばな」と、励みにもなっている。

生徒との対面・交流の様子は、見ている側も

暖かな気持ちに包まれる。

「ちよっつと見ない間に、しつかりしたね!」大きくなったあ「日に焼けたんじゃない?」

そんな農家からの言葉に、照れ笑いしながら、生徒も農家の体を気遣ったり、家のペットの様子を聞いたり。いつのまにか農家と生徒が、丸くなって、そここに「笑顔」がこぼれている。

子どもたちが気付かせてくれる

子どもたちを受け入れるからこそ、農家も頑張る。子どもたちが農家を活性化してくれる。農家のやる気を引き出してくれる。都市部の溢れんばかりの情報はないが、農家はゆったりとした時間の流れの中で暮らしている。そして、ビルに邪魔されない広い空や、落ちてきそうなほどの星空に包まれている。

「夜って、こんなに暗いんだねえ」「こんなにゆつくりできたの、初めて」

そんな子どもたちのつぶやきに、「田舎」には、「贅沢な時間」があること、自分たちのつくった農産物を食卓にのせる「食の豊かさ」そして、何より、自然の中で工夫して暮らす「生活の楽しさ」があることに、はっと気づかされる。

農家は、普段の生活で忘れてしまっている、もしくは、まったく気にも留めていなかった田舎の宝を子どもたちから教えられ、そして田舎に暮らすことを、改めて誇りに感じている。

三・一一を乗り越えて

二〇一一年の東日本大震災により、余震の不安と放射能の風評被害で、一一年度は当初二五

校、約三四〇〇人規模の受け入れ予定が、七校約一〇〇〇人までに落ち込んだ。その際に、かつて預かった子どもたちの母校から、たくさんの方や被害を心配する連絡や励ましの手紙などをいただいた。

震災は、たくさんの方の被害をもたらしたが、改めて学校や子どもたちと農家との、「心と心の結びつき」を感じることとなった。

推進協議会では、学校や子どもたちの安全や不安に応えるため、農家の居宅・子どもたちの体験フィールドの放射線量の測定と、数値の高い場所の除染を行った。そのデータを持ち、首都圏などで状況と安全の説明をし、震災二カ月で子どもたちの受け入れを再開した。

子どもたちを受け入れたいという農家の頑張りや学校や子どもたちがこの農家の意欲と頑張りに応じてくれたおかげで、一二年度には一四校、約一八〇〇人、一三年度は、一九校、約二五〇〇人の受け入れとなり、震災前の水準にまで、回復することができた。

来年度、推進協議会は一〇周年を迎える。高齢化による受け入れ農家の減少は深刻な問題である。市の広報誌やポスターなどで募集を行っているが、新規受け入れ農家の確保は今後の大きな課題である。

子どもたちが「また、おうしゅうに行ってみてみたい!」「お父さん、お母さんに会いたい」。そう思ってもらえるよう、推進協議会でも新規の農家の掘り起こしや、体験インストラクターの育成、研修への参加など、レベルアップを図り、力を合わせ、頑張っていきたい。

『農山村は消滅しない』

小田切 徳美 著



(岩波書店・780円税抜)

地方消滅論に挑む農山村再生論

村田 泰夫

(ジャーナリスト)

書名が表しているように、増田寛也編著『地方消滅』（中央公論新社、二〇一四年）の反論書である。同時に、人口が減って活気が失われている中山間地域をどのように再生していくのかを論じた「農山村再生論」でもある。

増田氏の地方消滅論は、全国の自治体に大きな衝撃を与えた。二〇四〇年の推計人口が一人以下の五二三市町村を「消滅する市町村」として名指ししたからである。このことを小田切氏は「消滅するからもう撤退しなさい」と呼び掛けていることに等しいと論難する。

農山村の現状について小田切氏は、楽観的に捉えているわけではない。集落内の人口減少や高齢化、農地が荒廃し、「人の空洞化、土地の空洞化、むらの空洞化」が進んでいると早くから指摘してきた。

しかし、全国の農山村を歩いてみると、そこに住み続ける住民の強い意志に支えられ、「どっこい生きていく」集落が少なくない。二〇一〇年の農業集落数は約一三・九万で、過去四〇年間に三%しか減っていない。

農山村集落は「強くて、弱い」という両面を持つているという。農山村の弱さの側面を抑え、強さを伸ばす仕組みづくりへの支援が求められているのに、地方消滅論は自治体や住民に「諦め」を勧め、地域への誇りを捨てさせ、地域づくりに取り組み意欲をそいでしまう。

地方消滅論は農山村からの撤退を勧め、都市への集中投資をもくろむ「農村たたみ論」だと小田切氏は指摘する。田舎に住む人が残っていれば行政サービスのコストが掛かるので、都市に移り住むべきだという考え方は、財政負担の軽減だけを考えた「霞が関」的思考である。

しかも、若者を中心に田舎暮らしを求めて農山村に移住する近年の「田園回帰」の動きを無視している。多数の都市住民が田舎に移り住んでいるわけではない。しかし、人口の少ない市町村にとつて、毎年数家族が移り住むだけで農山村の集落は劇的に変化する。島根県内の小さな集落で実際に起きている事例を本書では紹介している。

小田切氏はみずから、フィールドワーカーと称しており、本書には具体的な事例がたくさん盛り込まれている。それだけに論旨に説得力があり、読み進めていって分かりやすい。

読まれています 三省堂書店農林水産省売店(2015年1月1日~1月31日・税抜)

タイトル	著者	出版社	定価
1 農山村は消滅しない	小田切 徳美/著	岩波書店	780円
2 ポケット 肥料要覧 2013/2014	農林統計協会/編	農林統計協会	2,500円
3 史上最強カラー図解 プロが教える農業のすべてがわかる本 日本農業の基礎知識から世界の農と食まで	八木 宏典/監修	ナツメ社	1,500円
4 人とミルクの1万年	平田 昌弘/著	岩波書店	880円
5 週刊ダイヤモンド2014年11月29日号 JA解体 農業再生		ダイヤモンド社	657円
6 牛をすこし深読みしてみると	増田 淳子/著	農林統計協会	1,800円
7 EU共通農業政策改革の内幕 マクシャリー改革 アジェンダ2000 フィッシャー改革	アルビド・クニヤ、アラン・スウィンバンク/著	農林統計出版	3,500円
8 TPP交渉と日米協議 日本政府の対応とアメリカの動向	服部 信司/著	農林統計協会	2,500円
9 農山村再生に挑む 理論から実践まで	小田切 徳美/編	岩波書店	2,700円
10 シリーズ・いま日本の「農」を問う1 農業問題の基層とはなにか いのちと文化としての農業	末原 達郎、佐藤 洋一郎、岡本 信一、山田 優/著	ミネルヴァ 書房	2,500円
10 シリーズ・いま日本の「農」を問う2 日本農業への問いかけ 「農業空間」の可能性	桑子 敏雄、浅川 芳裕、堀見 直紀、櫻井 清一/著	ミネルヴァ 書房	2,500円

千葉産農産物の輸出拡大へ

千葉支店の現場レポート

政府は日本再興戦略において、二〇二〇年に農産品・食品の輸出額を一兆円にすることを目標として掲げています。

また、「和食」の国連教育科学文化機関(ユネスコ)の無形文化遺産登録や、二〇年の東京オリンピック・パラリンピックの開催などで、海外の方々の和食への関心が高まっています。

今後和食をアピールする機会が増えると予想され、輸出を促進する上では追い風となる環境が醸成されてきています。

一方、千葉県のホームページによると、一三年における農林水産物の輸出額は計一五億八六三〇万円ですが、その大半を水産物(七三億二七〇万円)と植木類(四二億四六六〇万円)が占めており、野菜・果実類、コメ、畜産物の輸出の合計額(一七〇〇万円)は全体の1%にも届いていません(表参照)。

千葉県は農業産出額四一四一億円を誇る全国第三位(二〇一三年)

の農業県ですが、東日本大震災による原発事故以降、風評被害と各国・地域の輸入規制の影響を受けており、農産物および加工品の輸出が伸びていない状況にあります。

輸出支援への基盤づくり

こうした現状を踏まえ、千葉県内の関係機関が連携・情報共有を積極的に行うために、日本公庫千葉支店が発起人・事務局となつて「千葉県産農産物等輸出促進協議会」を二〇一三年七月に設立しました。

メンバーは千葉県農林水産部、関東農政局千葉地域センター、日本貿易振興機構(JETRO)千葉貿易情報センター、千葉支店、県内の生産者が抱える農産物輸出に対する課題を整理し、県産農産物などの輸出促進策を検討しています。

特に、わが国最大の農産物輸出先である香港・台湾の輸入規制解除に向けた取り組みを強化してい

ます。

そこで、県内の生産者が抱える課題を把握するため、千葉支店のお客さま五八六先に対してアンケートを実施し、二〇三先から回答を得ました。

その結果、これまでに輸出を行った経験のある農業経営体は全体の四・四%(八先)にとどまりました。売上高一億円以下の農業経営体に輸出経験があると答えた先はないことから、輸出に取り組んでいるのは売上高一億円以上の生産者に限られるということが明らかになりました。

これを受け、千葉支店では、輸出に興味はあるが実績のないお客さまを重点支援先と位置付けて、輸出実現に向けた支援を開始しました。

まず、モデル事例として、県内稲作法人へのコメ輸出支援の取り組みを紹介します。

この法人は千葉県山武市で稲作(三〇〇畝)と土木業を経営。一四年八月一四〜一六日に香港で開催された国際食品見本市「FOOD EXPO 2014」に参加しました。その際、私たちも同行し商談をサポートしました。

生産者みずからが商談に参加し

商品の優位性をPRしたことも手伝って、マカオのバイヤーとの商談が具体化しました。結果として一四年一月からマカオ輸入業者経由で高級日本料理店への定期輸出が実現しました。

国内販売へ好影響も

さらに、この輸出実績をきっかけに、二〇一五年から県内スーパーとのコメの直接取引も開始。国内では米価下落の影響があり、稲作生産者の手取りが減少傾向にある中、同法人は通常年並みの収益性を確保することに成功しました。海外への輸出実績が国内販売へ好影響を与える「ブーメラン効果」を実証することができました。

千葉支店は同法人が輸出を開始するに当たり、商標登録を行うよう助言し、世界一六の国・地域において申請を行いました。また、輸出用米を保管するための低温倉庫と色彩選別機を新たに導入する必要が生じたため、公庫資金にて支援しました。

次に、海外バイヤーとのネットワーク構築のため、一四年一〇月にNPO法人日本食レストラン海外普及推進機構(略称「JRO」との共催のもと、中国・香港などの



パイヤーと商談する農業法人

表 千葉県産農水産物の輸出額

輸出品目	輸出額(百万円)			
	2010年	2011年	2012年	2013年
農産物	2,543	2,807.6	3,382.5	4,263.6
植木類	2,456	2,793.2	3,377.4	4,246.6
野菜・果実類	62	10.0	0.5	0.8
(内訳) 花き	3	0.0	1.6	-
コメ	1	0.4	0.0	0.1
畜産物	21	4.0	3.0	16.1
水産物	7,461	4,765.5	8,183.1	7,322.7
合計	10,004	7,573.1	11,565.6	11,586.3

出典：千葉県ホームページ

バイヤー一三人を招いて、県内農産物および加工品の商談会と生産施設の視察を実施。成田市内のホテルで開催した商談会には農業法人、食品企業計八先が参加し、自社商品のPRを行いました。

視察を受け入れた千葉市内の冷凍食品会社では香港、シンガポールへの輸出開始に向けて検討を進めていました。

今回の視察をきっかけに、一五年二月に香港で行われた商談会へ出展し、この機会に併せて、公庫の有するバイヤーとのネットワークを活用し、個別商談を行いました。

輸出推進へのハードル

しかし、こうした一連の取り組みは、まだ緒に就いたばかりです。これまでの千葉支店の活動の中から、農産物の輸出を推進していくには、大きく分けて以下のハードルがあると考えています。

まず一つは、被災地周辺農産物の輸入規制の緩和・解除です。

二〇一三年において、わが国の農産物輸出先の第一位は香港であり、その輸出額は五九六億円で全体の一九・〇%を占めています。次いで台湾が五六八億円(一八・二%)、米国が四九六億円(一五・八%)と

続きます。

今後、千葉県において農産物輸出を増大させるには、これらの国・地域への輸出促進が不可欠です。他県に比べても成田国際空港という大きな空港を擁していることや首都圏に近いなど優位な輸出環境にあるため、香港や台湾の輸入規制緩和・解除に向けた取り組みを加速させることが重要です。

二つ目は、農産物輸出に関わる諸手続きの簡略化と物流の改善です。

生産者にとって、特に書類の作成や税関手続きはハードルが高い上に時間がかかり、輸出への取り組み意欲を減退させる一因となっていることが明らかになりました。

そこで千葉支店では、まずモデル的に、一四年度から公庫資金活用推進事業(地域農業支援事業)を活用し、国家戦略特区の指定を受けた成田市と業務協力体制を構築しました。

同市は成田国際空港を利用した農林水産物の輸出拡大のため、一四年一〇月に「成田市場輸出拠点化研究会」を設立し、千葉支店もメンバーとして参加しています。

同研究会で千葉支店長は「ハード・ソフト両面における農産物輸出の最先端システムを兼ね備え、空港に隣接したワンストップ物流拠点を整備することや、農業法人などの生産者が取り組む輸出事務に関してのトータルサポート(貿易アドバイス、書類作成代行、代金決済など)機関の設置が必要である」と提言しています。

三つ目は、生産者の輸出関連情報不足の解消です。

前述のアンケート結果によると、県内の四四%の生産者が輸出に興味を示していることが確認され、徐々に公庫のお客さまの中でも実際に輸出を開始する生産者が現れてきています。円安の影響もあり、農産物の内外価格差が縮小することが想定されるため、今後、生産者にとっては輸出に取り組むチャンスがさらに拡大していく可能性も考えられます。

そのため、関係機関においては、こうした将来的なメリットを生産者へ説明することや積極的な情報提供などの支援が求められます。

さらに、輸出を志向する生産者の販路開拓をサポートできる体制を確保するために、海外を含む流通関連業者などとの人的なネットワークを広げることが重要です。

(千葉支店 百田 裕樹)

● 交叉点 ●

タイでビジネスチャンスを支援する商談会を開催

二月一日、バンコク市内で日本公庫のお客さま支援の一環として、タイ中小企業開発銀行などとの共催で、第八回「日タイビジネス商談会」を開催しました。

タイで事業展開する電子部品関連から食品関連まで、さまざまな業種の日系企業や現地資本の企業(合計二〇七社)にご参加いただきました。現地での製造提携や販売ネットワークを築くまたとない機会となり、全体の商談件数は六九四件と、活発な商談が行われました。

(情報企画部)



ビジネスチャンスをつかもうと熱気に包まれた商談会会場

宮崎のスーパーで佐賀の物産フェアを開催

地域振興プロジェクトの一環として、太良町異業種交流研究会の活動をサポートしています。これまで三回にわたり六次化プランナーなどの講師を迎え、地元食品加工業者が参加し、商品開発などを学ぶ研修会を実施。地場産農産物を活用した商品開発、またパッケージデザインの重要性を学びました。

その実践の場として二月二日(一四日)に、宮崎市のスーパー「フリー」のご協力により、佐賀県物産フェアを開催。参加者は熱心に自社商品を売り込み、「次の商談に向け、多くの収穫がありました」との感想が寄せられました。(佐賀支店)



佐賀がばい うまかフェアの店内の様子

新規就農者へ経営方法をアドバイス

二月二日、鳥取県湯梨浜町にて「新規就農者研修会」を開催し、鳥取県内で近く農業経営を開始する予定の一三人(夫婦参加二組を含む)にご参加いただきました。

農業経営上級アドバイザーの井崎敏彦氏を講師にお招きし、税務関係や経営者としての心構えをはじめとする就農前後の留意事項や経営成功の秘訣などについて、分かりやすく講義いただきました。熱心にメモを取る参加者も見られ、「これまで知らなかった内容が多く、就農の手続きなどがスムーズに行えそうです」などの感想が寄せられました。(鳥取支店)



講師の説明に熱心に聞き入る新規就農予定者

信州でビジネスチャンステーマに講演会を開催

二月九日、長野市内で長野県農業法人協会との共催で「信州アグリフードフォーラム」を開催し、県下の農業者・食品産業のお客さまや関係機関など総勢四三人にご参加いただきました。

講演会では岐阜市のわかば農園株式会社代表取締役である三浦茂雄氏をお招きし、「カット野菜でつかんだビジネスチャンス」と題してご講演いただき、参加者からは「農産物加工業に未来を感じる事ができました」などの感想が寄せられました。また、長野県農業開発公社などから情報提供をいただき有意義な交流会となりました。(長野支店)



参加者からはさまざまな質問が寄せられました



開会式のテープカットの様子

「アグリフードEXPO大阪2015」は両日とも盛況
 二月一九日、二〇日、日本公庫は第八回「アグリフードEXPO大阪2015」を開催しました。
 大阪での開催が八回目となる今回は、四七六先の農業者および食品製造・加工業者の皆さまにご出展をいただきました。
 入場者は一万四九五六八人、商談引き合い件数(※)は四九一五件となり、活発な商談や交流で会場は賑わいました。
 「国産農産物バイヤー講演会」では、国産志向の有力バイヤーによる講演の後、聴講した出展者との名刺交換の時間を設け、商談成約の後押しをしました。



会場は終日盛況

また、農産物・食品の「輸出」を促進すべく、今回も日本貿易振興機構(ジェトロ)が、一カ国・地域から一六社の海外バイヤーを招き、輸出商談の機会を設けました。
 さらに、海外展開相談コーナーでは、輸出事情に詳しいジェトロ、日本貿易保険および貿易会社をアドバイザーとして招き、出展者の皆さまからの農産物や加工品の輸出に関するご相談に応じました。
 詳細な開催結果は改めてお伝えします。
 ※数字は二日間の合計。商談引き合い件数とは、商談会終了後も継続して商談を行う予定の件数。出展者から当日提出いただいたアンケート結果に基づくもの。
 (情報企画部)

「技術の窓」で農業の最新技術情報を提供しています!

「技術は経営の基盤」です。日本公庫農林水産事業では、試験研究機関などの研究成果や現場で役立つ実用化技術のポイントをまとめた「技術の窓」をホームページ上 (<http://www.jfc.go.jp/n/finance/keiei/technology.html>) で毎月提供しています。また、メール配信サービスでは、これらの更新情報をお知らせしています。ホームページ (http://www.jfc.go.jp/n/service/mail_nourin.html) にアクセスしてご登録ください。

「技術の窓」のバックナンバーは、ホームページへアクセスし、

- 1 融資のご案内の「一覧を開く」
 - 2 「経営お役立ち情報」
 - 3 「農林水産事業」
 - 4 「最新技術情報」
- をクリックして、ご覧ください。

技術の窓バックナンバー

- No.2036 歩数計から得られた発情開始時刻から初産牛と経産牛の授精適期の推定が可能
- No.2037 マルドリ方式等の水源を確保するための太陽光発電を用いた揚水システム

- No.2038 贈答用リンゴの顧客拡大にむけた「おすそわけ袋」の消費者評価
- No.2039 泌乳牛に対する輸入トウモロコシから「飼料用玄米への代替給与法」など

メール配信サービスのご案内

日本公庫農林水産事業本部では、メール配信による農業・食品産業に関する情報の提供をしています。メール配信サービスの主な内容は次の4点です。

- ①日本公庫の独自調査(農業景況調査、食品産業動向調査、消費者動向調査など)結果
- ②公庫資金の金利情報や新たな資金制度のご案内、プレス発表している日本公庫の最新動向
- ③農業技術の専門家である日本公庫テクニカルアドバイザーによる農業・食品分野に関する最新技術情報「技術の窓」
- ④日本公庫が発行する「AFCフォーラム」「アグリ・フードサポート」のダウンロード

メール配信を希望される方は、日本公庫のホームページ(http://www.jfc.go.jp/n/service/mail_nourin.html)にアクセスしてご登録ください。(情報企画部)

◆農業経営が難しいのはどうしてでしょうか。私は農産物を出荷するための規格であるサイズ、色合い、形質など、見た目で評価することが多いからだと思っています。農家は同じ畑でつくった作物がこの選別により一〜二割は規格外品として生産地で廃棄されています。この規格は誰が決めたのでしょうか。そして、誰のための規格なのでしょう。農家は規格に合うよう努力して生産をしていますが、生産者の声を消費者に、そして消費者の声を生産者に聞いてもらうことが大切だと思います。

また、この規格外品や廃棄物を

利用する取り組みも必要だと思います。農業単独ではなく、商工との連携などを活用し、農業の視点だけではない価値ある製品ができるのではないのでしょうか。捨てるのは「もったいない」です。

(足立区 鈴木晋作)

みんなの広場へのご意見募集

本誌への感想や農林漁業の発展に向けたご意見などを同封の読者アンケートにてお寄せください。「みんなの広場」に掲載します。二〇〇字程度ですが、誌面の都合上、編集させていただきます。

「郵送およびFAX先」
〒100-0004
東京都千代田区大手町一四
大手町フィナンシャルシティノースタワー
日本政策金融公庫
農林水産事業本部
AFCフォーラム編集部
FAX 〇三三三七〇一三五〇

編集後記

◆手慣れた事務や家事でも「あ、こんなやり方あったんだ」と気付きを得ることが間々あります。何かを合理化しようとする場合、ひとまず観察や模倣は大事なこと。日本の中小企業はこれまで競争にさらされ、弱点を克服し強みを磨いてきました。異業種から学び起こる化学反応が、農業にイノベーションをもたらすことに期待しています。(竹本)

◆土に触れただけで、何か気持ちが悪く落ち着くことってありませんか？私は昨夏、家庭菜園デビューして、庭の片隅にナスの苗を植えたときの充実感が忘れられません。その何倍もの喜びを知っているのが「農と食の邂逅」のアグリーの皆さんだと思います。この仕事が大好きでたまらないといった笑顔がいっぱい。この野菜、絶対おいしい！(小形)

◆水野真紀さんがスーパーの魚売り場で真っ先にチェックすると聞いて、のぞきこんだ。あら、コーナー。新鮮なマダイの頭やブリ、サケの腹が並んでいました。きれいな切り身ではないけれど、濃厚でおいしい。そして、ご存じのとおり、たくさん入っているのに安いのです。なんてすてき。わが家のマスト食材になりそうです。(城間)

◆農産物の輸出支援について、千葉支店の現場レポートを紹介しました。本文中にある輸出推進へのハードルは、全国どの地域においても想定されるものだと思います。同様の支援体制が整備され、輸出に高い関心を寄せる農業者の方々がスムーズに挑戦できる素地ができれば、和食文化の裾野も広がっていくでしょう。(林田)

AFCフォーラム Forum

- 編集
大本 浩一郎 竹本 太郎 清村 真仁
小形 正枝 飯田 晋平 城間 綾子
林田 せりか
- 編集協力
青木 宏高 牧野 義司
- 発行
(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部
Tel. 03(3270)2268
Fax. 03(3270)2350
E-mail anjoho@jfc.go.jp
ホームページ <http://www.jfc.go.jp/>
- 印刷
株式会社第一印刷所
- 販売
(一財)農林統計協会
〒153-0064 東京都目黒区下目黒3-9-13
目黒・炭やビル
Tel. 03(3492)2987
Fax. 03(3492)2942
E-mail publish@aafs.or.jp
ホームページ <http://www.aafs.or.jp>
- 定価 514円(税込)

- ◆ご意見、ご提案をお待ちしております。
- ◆巻末の児童画は全国土地改良事業団体連合会主催の「ふるさとの田んぼと水」子ども絵画展の入賞作品です。

第10回記念 6次化の先駆者—EXPO仲間大集結



アグリフード EXPO 東京 2015 プロ農業者たちの国産農産物・展示商談会

日時 8月18日(火)/19日(水) 10:00~17:00 / 10:00~16:00
主催 JFC 日本政策金融公庫

会場 東京ビッグサイト 西1・2ホール



AFC Forum 3

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers 2015

特集

農に活かす異業種の「知恵」

3 顧客満足、利益・雇用確保を実現する農業へ

藤本 隆宏
生産管理、販路開拓など課題が山積する今後の農業経営に、異業種で発達した「ものづくり」の原理をいかに応用するか。成功事例から考察する

7 異業種のビジネス手法を農業に生かす

楠元 武久
国が成長を期待する分野と位置付けられる農業。「強い農業」になるため、6次産業化をさらに一歩進化させる手法を異業種から学ぶ

11 生産性を上げた「トヨタのカイゼン」手法

木村 誠
トヨタ自動車との運命的な出会いにより、トヨタの生産方式やモノづくりの哲学を学び、生産性の向上を見事に実現した農業生産法人がある

情報戦略レポート

15 養豚、採卵鶏は増収増益 稲作、茶、肉用牛は大幅減益に

—2013年農業経営動向分析—

経営紹介

経営紹介

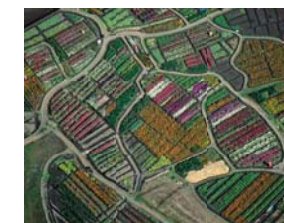
23 地域特性生かし環境変化に対応 エコフィードや稲WCSで活路

有限会社川淵牧場／高知県
「逆風に向かってこそ飛躍のチャンスがある」。メガファームに成長した酪農家は直面する問題に、地域の特性から解決策を見出してきた

変革は人にあり

25 石原 和秋

イシハラフーズ株式会社／宮崎県
野菜の冷凍加工会社が農業へ参入。農業者とリスク分担する「共同委託生産」や「フィールドマン」による情報管理など独自の手法が経営を成功へ導いた



撮影：豊高 隆三
千葉県南房総市千倉町
1998年3月撮影

千倉の花畑・空撮

■房総半島の最南端に位置する千倉では、温暖な気候を生かし花の栽培が盛んだ。早春にはストックとキンセンカを中心とし、花盛りとなる。花畑を上空から望むと、まるで春色のパッチワークのようだ■

シリーズ・その他

観天望気
持続可能な社会の原則 谷口 吉光 ……2

農と食の邂逅
株式会社アグリー 井上 早織
青山 浩子(文) 河野 千年(撮影) ……19

耳よりな話 156
酪農関連の碑めぐり(その8) 加茂 幹男 ……22

フォーラムエッセイ
大切にしていきたいこと 水野 真紀 ……28

まちづくり むらづくり
農村生活体験のグリーン・ツーリズム
農家と子どもが奏でる「こころ」の交流
おうしゅうグリーン・ツーリズム推進協議会 ……29

書評
小田切 徳美 著『農山村は消滅しない』
村田 泰夫 ……32

インフォメーション
交叉点 千葉産農産物の輸出拡大へ
～千葉支店の現場レポート～ ……33

交叉点 タイでビジネスチャンスを支援する商談会を開催
情報企画部 ……35

宮崎のスーパーで佐賀の物産フェアを開催 佐賀支店 ……35

新規就農者へ経営方法をアドバイス 鳥取支店 ……35

信州でビジネスチャンスをテーマに講演会を開催 長野支店 ……35

「アグリフードEXPO大阪2015」は両日とも盛況 情報企画部 ……36

「技術の窓」で農業の最新技術情報を提供しています！ ……36

みんなの広場・編集後記 ……37

ご案内

第10回記念 6次化の先駆者—EXPO仲間大集結

アグリフードEXPO東京2015 ……38

*本誌掲載文のうち、意見にわたる部分は、筆者個人の見解です。

AFC Forum

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers

3

2015

AFC Forum

2015
3
特集

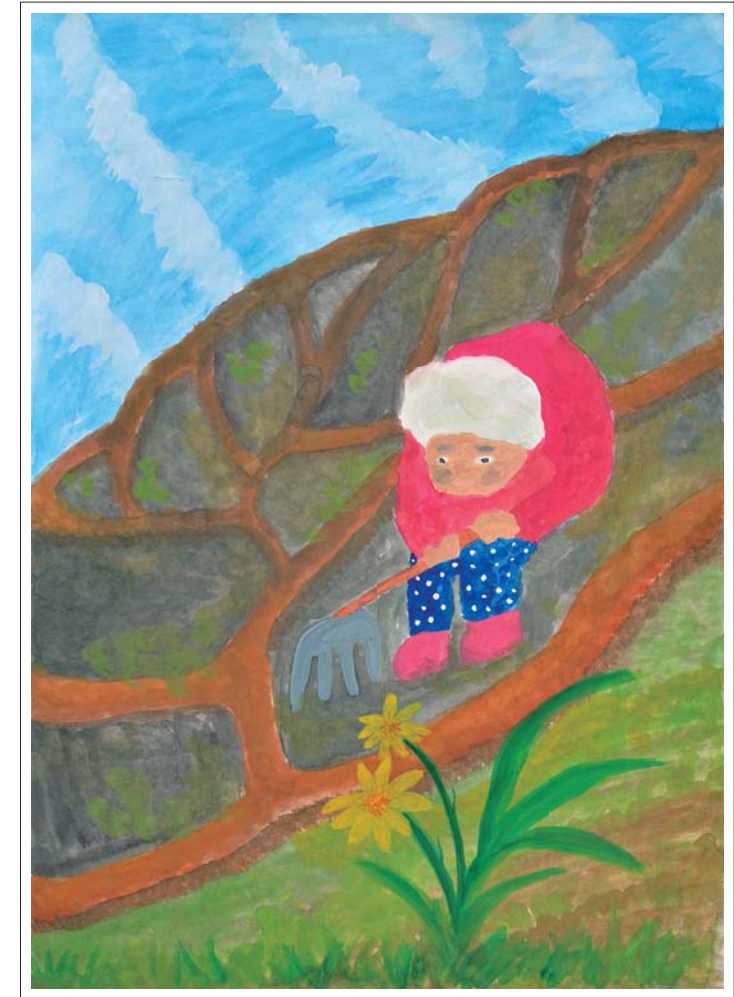
特集 農に活かす異業種の「知恵」



農に活かす異業種の「知恵」

■AFCフォーラム 平成27年9月1日発行(毎月1回)日発行/第62巻12号(775号)
■発行/(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-4 Tel.03(3270)2268
■販売/一般財団法人 農林統計協会 〒153-0064 東京都目黒区下目黒3-9-13 Tel.03(3492)2987 ■定価514円 [本体価格 476円]

●次代に継ぐ



『千まい田』西口 秋楓 石川県輪島市立鳳至小学校



JFC 日本政策金融公庫 農林水産事業本部

<http://www.jfc.go.jp/>